

5) 病虫害防除

疎植栽培では、単位面積当たりの苗箱数が少なくなるため、必然的に箱施用剤の使用量が削減されるが、稲体の殺虫成分濃度は、慣行栽培とほぼ同様に推移する。そのため、箱施用剤の使用量が減少しても、主要害虫に対する防除効果は、慣行栽培とほとんど変わらない。また、疎植栽培における主要な病虫害の発生様相は、面積あたりでは、慣行とほぼ同様な経過をたどるが、植え付け本数が少ない分、株当たりの虫数や被害は多くなるので、箱施用剤は必ず施用する。また、本田防除は慣行栽培どおり実施する。

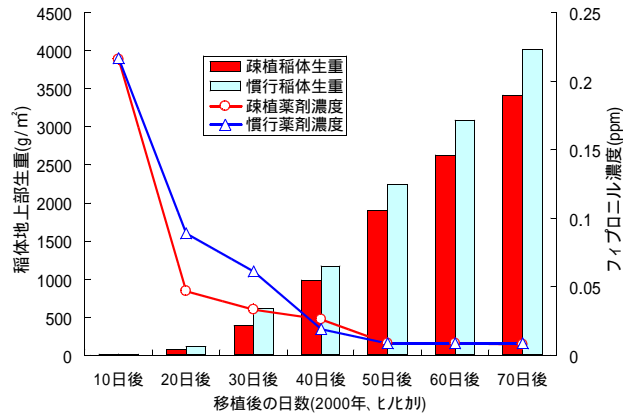


図14 株間拡大した疎植栽培での稲体中のフィプロニル濃度の推移

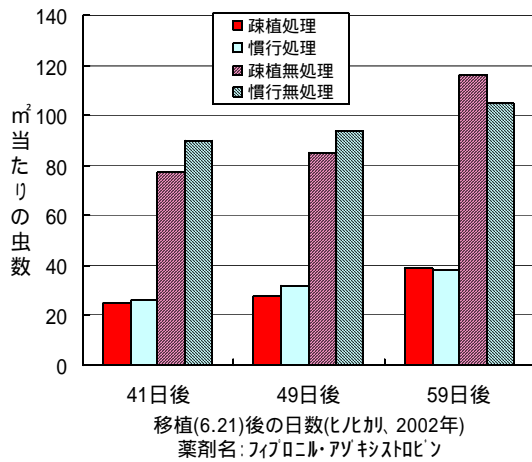


図15 箱施用剤の防除効果(セジロウンカ)

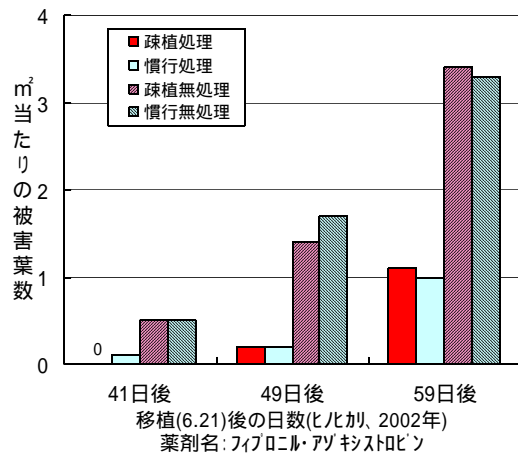


図16 箱施用剤の防除効果(コブノメイガ)

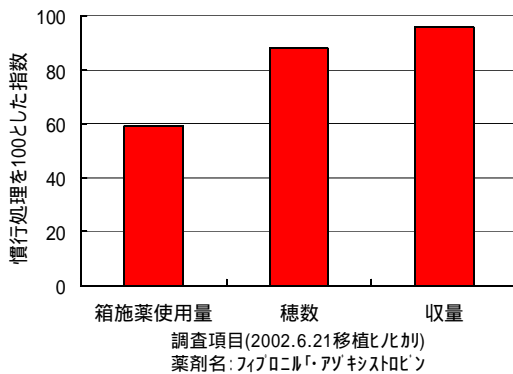


図17 疎植栽培での箱施用剤使用量と穂数・収量

箱施用剤の使用量が減少しても、防除効果は低下せず、収量も同程度確保できる。